

豚の肥育と増産について

岡本俊弥

まあ、とにかく気になることなら、何でも口にしちゃうやつなんだ。

わたしもそうだけど、とにかくしゃべる。うるさい。

ただ、自己中とかではなくて、自慢話じゃないから、許される範囲ともいえる。

あいつは憎めないやつなんだよね。結構大柄なんだけどいかつくなくて。安心できるといえるか、構えなくていいとか。

問題なのは場所かな、と思う。TPOが分かってなくてね。

もう慣れたけど、お酒の場であいつが仕事の話をする、決まって怒り出す人が出てくるのは閉口した。

声が低くて、ふだんなら目立つほどではないのに、騒がしいところほど結構遠く

まで聞こえるらしい。

「どうしてくれるんだ、お前のせいだろう」

「食えない責任をとれよ」

話を耳にした酔っ払いが、割り込んでくるんだよ、これがまたやつかい。

政府の対応遅れは、たびたびマスコミから非難を浴びてる。無能だバカだケチだとか陰謀だとか、あるでしょそういうの。不確かなうわさを信じ込んでる小心者が、しらふなら口にもしない話題なのに、たがが外れて乱入する。酒に呑まれた酒飲みは、どこでも厄介なもんだけどね。

「いやいや、そらちがいます、そんな問題やない。人でパンデミックが起こったわけですやろ、よう似たことがまたあったと考えるんが、論理的やないですか」

とか、やつが反論しても、まるで聞いてもらえない。だいたい酩酊してる相手に、理屈で返してどうするつもりなの。

だから、不特定多数がいる居酒屋のような場では、なるべく黙ってるって言うてんの。議論好き、おしゃべり好きなあいつとしては、それはそれでストレスが溜まるよ

うだけど。

とはいえ、世間のフラストレーションはそれどころじゃ済まないよね。もうだいぶ経ってるけどさ、解決のめどが見えない。

わたしも、やつに向かって愚痴をたれることはあるよ。

「もう一度何とかならないもんかね。まず、油を引いた鉄鍋に入れるでしょ、次にざらめの砂糖をひと匙、醤油を適度に振って、それから本格的に焼く、甘みと辛味の絶妙の混交、あの匂い」

「関西風やね。割り下に頼らず、上等のうまみだけで味を付ける奴や」

「そうだよ、何とかしてよ」

すると、声を潜めるかのように手で口を覆って、耳元でささやくんだ。

「まだ、いつとは言われへんなあ」

「ばかやろう、誤魔化すなよ」

すると、似合わないあいまいな笑みを浮かべて、

「そない言われても、自分が決められることとはちやうからねえ」

なんて、とぼけるんだよね。

最初は検温。

これはあたりまえかな。もちろん発熱してたら入室できない。

次にパネルの前に立たされ、質問票に答える。主には過去二週間の行動が、機械から問いかけられる。抗体検査をいつしたのか、結果はどうだったとかね。機械は答えを知ってる。ここで嘘偽の申告をすると、入室以前に処罰の対象になる。そんな職員は知らないけど、結果によっては刑事罰を喰らう。

ちよつと過剰なくらいのペナルティでしょ。でも、ここから先が汚染されると、リカバリができないんだよね、だから仕方ないわけ。

衣服を着替えないといけない。

だれでもだよ。男も女も、偉い人も下っ端もね。

滅菌シャワーを全身に浴び（肌が荒れて、あまりよろしくない）、防護服とフェースマスクを着け、さらにエアシャワーのトンネルを抜けると、二重ドアで締め切られた

陽圧室にようやく入れる。

慣れたとはいえ、とても煩わしい。

正面にはセンターの標語が掲げられている。

COMMUNITY

IDENTITY

STABILITY

「いつも思うんだけど、なんで英語なのよ。日本なのに」

あいつに聞いたことがある。

「要するに、ここは孵化センターなわけやね。日本語やったら訳語がいろいろあって、紛らわしいからやないかな」

と、よく分からない答えをもらった。

「ないかな、っていわれてもな」

ドアを抜けると広い廊下がある。廊下の両サイドは透明の壁だ。壁の向こうは、区画に別れた小室がある。幾重にも仕切りがある。一度にすべてが開放されることはない。

それだけ手間をかけ、厳重に守られているものはなんだと思う。もちろん、わたしから人間じゃないよ。

豚、豚です。施設内に隔離された「保護豚」。

区画にはよく太った豚が数匹づつ飼われているの。子豚は別に管理されているから、大人の親豚しか見えない。温和しく、短期間で太りやすい品種ばかりだね。

つまり、豚の孵化センター、養豚場でもあるわけ。

かつては国内にも四カ所あったものが、もう全部で四カ所しか残されていない。しかも、食用のための生産はしてないの。種の保存か、耐性研究用かに限られるわけだよ。

食べる楽しみは減ったよね。

あいつは昔から食べものにはあまりこだわりがない。手軽なファストフードが好み

らしい。そんなジャンクフード漬けはかわいいそうだからって、外食するときは誘ってやる。

わたしとしては、人からのお奨め情報とかを確かめたくて、一人で行くのも何だからご一緒するわけ。選ぶのに格付けサイトみたいな、平均化された評判はあまり気にしない。あいつの場合、自分では選べないけど、ついてくのならいいみたいね。まあおいしいか、いまいちかぐらいなら、分かるみたいでさ。

家畜の肉がなくなつて、もう五年かそれくらい。

肉のない生活なんて想像もできなかったよね。一時的に入手困難とかじゃなくて、永久におさらば。いろんな種類の豚も、ピンからキリまであった牛も、あれほど安くて大量にあつた鶏肉もないなんて。

代替肉ならある。

大豆から作る代替肉は、ハンバーガーくらいまでならまあいける。でも、ふつうにある料理すべての代わりにはならない。そりゃそうだよ。使い方や調理法に合わせて何百年も品種改良された肉が、大豆ですぐに模倣できたらおかしいだろ。まずい代用

肉でも、値段はとっても高い。高騰したのよ。ハンバーガーは高級料理だよ。ないよ
りあるだけまして、うん、そうなんだよね。

レストランとかはたいへん。

にわかベジタリアンの肉レス料理は、明らかにまずい。味付けだけでは、とてもご
まかせないんだってわかる。まさか、味オンチの自分の舌で、違いが分かるほど変わ
るとはびっくりだね。フランスや中華の高級料理なら、調理法で煙に巻くという手
もある。でも、居酒屋クラスのメニューに、コストはかけられないよね。

見かけはよく似てるのよ。焼き鳥とかベーコンサラダとか、つくね、肉団子とか、
肉があるように見える。ごまかしが上手いので、予め肉レス料理であっても、目は
肉があると思っちゃう。でもまだ味までは及ばない。食べたあとの食感の落差に、げ
っさりするのよ。

わたしは大学の畜産科を出た。いまは養豚場の飼育員。

子どものころは、動物のお医者さんになりたかった。実家には母親が大昔にそろえ

た佐々木倫子のマンガがあつて、本がボロボロになるまで読みふけたもんだ。ペットの医者だったらよかつたのに、といまでも思う。

この仕事はどうか。社会的貢献度の高い飼育員ではあるけど、びみょう、だよ。勤めているのは、農水省農業食品産業技術研究機構生物疾病研究センター治験試験場という、ばかばかしくも長つたらしい名前がついているところ。

地方自治体の農事試験場ならともかく、まさか国家公務員になるとはね。

月給は安い。同窓生の就職難を考えると幸運ではあつた。仲間には悪いけど、食べるだけまし。でも、ペットの医者になつていればもつとよかつた、しつこいね。ああ、でも獣医にはなれなかつたな。

大学時代は、何か特定の動物を集中して勉強したわけじゃない。でもね、畜産なので、家畜全般幅広いといつても、鶏、豚から牛までがメインだよ。ペットは対象外。生き物ではあるけど、かれらは生産装置ないし製品そのものになる。効率よく育て、無理なく太らせ、快適に卵を産ませ、できるだけ短期に肉にする。ケアが大変で情が移つても、お友達にはなれない。

実習では、苦勞して赤ちゃんから育てた牛を食べたこともある。さすがに自分で畜殺はしなかったけどね。かわいい賢そうな目をしてた。泣きそうだった。

それでも、罪悪感をはるかに越えて、肉はとも旨かったのよ。なんてこと。

豚に蔓延した致命的疾病は、運良く人には影響がなかった。

正確に言えば、感染はするが無症状なのだ。年齢性別人種を問わず、わずかに体温が上がる程度で、自覚的な意味では気がつかない。だからこそ、ウイルスの存在を知られる前に、人を介して世界の養豚場は広く汚染されたわけ。

鶏は運が悪かったよね。

インフルエンザが鶏^{II}鳥、豚、人で相互に交換可能というのは昔からよく知られている。過去、豚インフルエンザが鳥にも致命的という例はなかったのに、それはたまたま偶然にすぎなかったんだろうね。

養鶏場は軒数こそ二カ所と豚より少なかったものの、飼育数が桁違いに多い。国内で処分された鶏は一億四千万羽に及ぶんだって。おそろしい。

悪いことは重なる。

牛疫って病があったことはたぶん知らないよね。

病原がウイルスと分かったのは最近で、はしかと類縁関係にある。つまり、もともとは人獣共通感染症だったんだよ。中央アジアで中世ごろに発生、近世の欧州で二億頭の牛を殺し、一九世紀にはアフリカの牛や水牛の九割を死に追いやった。こわい病気だけど、天然痘と同様に撲滅されたと思われてた。問題は、この病気は牛を殺す一方、意外にも豚をキャリアにするってこと。

今回のウイルスは豚＋鶏インフルエンザで、牛疫とは関係がないと思われてた。でもね、同時に牛疫バージョン2とでもいえる変異ウイルスが生まれてた。これはインフルエンザに隠れて豚の体内で増殖し、人も媒介するだよ。牛に感染する可能性なんてだれも考えなかった。ちょっと遅れて、その正体が分かったときには手遅れだった。国内だけで四百万頭、北米では一億頭もの牛が処分されたらしい。これって、ほんとうに恐怖だよ。肉牛も乳牛もだよ。

みんな合理的に工業化されてたのが災いの元だろうなあ。狭いところで密集して飼われてたから、ひとたまりもないよね。人のパンデミックの比じゃないよ。

いちばんしんどいのは、飲食店じゃなくて生産者や流通業者だろうね。国内では三兆円分の稼ぎが消えちゃったんだから。大きな養鶏業から、数頭単位の牛の育成で生活してた零細農家まで、すべての供給源がわずか半年の間に失われたのよ。

海外はそれどころじゃない。

二〇〇兆円の市場が消え、アメリカ、アルゼンチン、オーストラリアとかの輸出に依存する国は、貿易統計がぐらつくほど壊滅的な損害を被ってるの。

あいつはわたしより二つ、いや三つ年下だけか。でももつと下の弟みたいな気がする。仕事はできるんだろうけど、ちょっと抜けてるところがあつて、なんだかほつとけない気分。

雑談の合間に、仕事絡みの話もする。

「ひどかったよね。最初のころはさ、生まれてくる子が全部死産でさ、ああ、また死んでるって気分は最悪だった」

「手探りやったからね。十分な時間はもらえへんしなあ。上からはアジャイルでやれ、

とかアホな命令が来よるしね」

「アジャイルって意味分かってんのかね」

「そら、分かってえへんよ。流行語を使ってるだけや」

「アジャイルって、失敗を繰り返すトライアルアンドエラーじゃない。もつと確実にやれっての。たとえ相手が豚だってね」

「かわいそうやけど、豚は生き物扱いされへんからな。製品や」

「でも生き物の失敗作は死体だからね。何度も何度もトライして、死体を積み上げるんだよ。それって倫理的にどうよ」

「ペットなら許されへん。けども、豚はポークの原材料やからな。材料を反故にするのはもつたないけど、倫理的いうてもその程度までや」

「それって意味が違うよ」

「人種や国籍、性別に境界はない、野生動物やペットにも権利がある。その理屈を進めて、生命すべてに境界はないとするのがアニマル・ライツの考え方や。動物すべてに固有の権利があるとしたら、家畜も同じやないか。どっちにしても、それは人間の

立場からの見方やな。権利主張するのは人間やし、家畜の子どもを太らせて食うのも人間や。そんな矛盾した人間が、えらそうに他の生き物の代弁者になれるんか」

あいつは珍しく正論を口にした。

「難しいねえ」

わたしはため息をつくだけだった。

この生物疾病研究センターは、にわか作りの典型かも。

被害が確定的になった後に、急遽造られたんだから。目先の食肉業界支援の裏で、将来的な対策を進めようと始まった。国が数年より先を考えて予算を組むのは、昨今では珍しいよね。他の国で進む事業を見て焦ったんだろうけど。下手すると、復活する（かもしれない）食肉産業のキーテクノロジを奪われかねないってね。

このセンターは、ワクチンや予防薬の開発を目的とはしてないのよ。目先ならそれも重要だったけど、ここまで事態が進んじやうとね。なにしろ、食肉生産がゼロになつちやうと、防疫の価値はぜんぜん薄れるから。

家畜の根本的な改変を行うべきだ。食料産業を支える骨太の家畜を作り上げる、つて、大臣は開所式でバカみたいな演説をしたなあ。骨太にするだって、それじゃ肉が減るじゃない。官僚の作文だろうけど。

試験場では、ウイルス受容体を持たない、遺伝子改変された家畜が飼われてる。薬に頼らず、変異する疫病に罹患しない新しいバージョンの家畜こそがターゲットなのだ、なんてね。

ここは病気から解放された、豚のユートピアを目指してるのよ。
Communityとは、ウイルスと共存できること。Identityとは、日本独自のIPすなわち遺伝子を持つ存在であること。Stabilityとは、安定的な生産をもたらすもの、つて三つのスローガンの意味だよ。もちろんそれは人間の都合だろうけど。

豚だけじゃない。

別の棟には鶏がいて、さらに別の場所で牛が飼われてる。成長するまでのサイクルがちがうので分離されてるけど、テクニカルな遺伝子編集のノウハウは共通する。

そう、あいつの専門はそこなのよ。バイオテクノロジーが専門。

わたしも基礎は習ったけど、あいつの場合は生物工学の大学院を出てる。

CRISPRは、ノーベル賞でも有名になった遺伝子編集の手法。でも、それだけじゃ、工業生産に応用可能なほど安定してないんだって。一般的に改変箇所は複数あって、職人技でも人手に頼ると二桁パーセント近くの失敗作が生まれちゃう。それを量産可能なレベルにまで高めるのが、センターの目標なんだ。

「まず、この技術を適用した親豚を作るんや。遺伝子は子にも引き継がれない意味ないんやけど、厳密に交配管理せんと失われてまう。安定するまで交配を繰り返す。遺伝子の編集に失敗したら、子どもは異常な遺伝子を持つようになって、死産か生まれても長生きでけへんねん」

イノシシの血を引く豚は、もともと多産ですぐ大人になるのよ。それでも産業の復活を目指すためには大增産が、さらなる加速が必要になる。だから成長遺伝子も編集する。難易度がどんどん増すよね。

わたしはその編集豚の、かかりつけ飼育担当なのよ。

一匹一匹にチップが埋め込まれ、バイタルデータはリアルタイムに記録、分析され

る。名前なんてなくて、コードがついてるだけ。食用の家畜には、名前が与えられないのはふつうだけど。

豚の寿命は、ほんとうだと二〇年くらいある。でも、食用豚は半年あまりで出荷（つまり畜殺）されるし、繁殖用の雌豚も三年で入れ替わる。長生きなんてできない。ここだと出荷がない分、高速に世代交代を繰り返して最適な遺伝子を探っている。

遺伝子改変生物GMOは、これまでほとんど食用に生産されたことがないんだよ。ごく例外的にサケが許可されただけ。消費者が受け入れてくれないからね。植物ではトウモロコシや大豆とか、遺伝子改変作物がもう広く普及してる。

でも、加工用の植物と違って、食肉は素材が直接消費者に出て行く。ラベルにGMOと書いてあったら敬遠される。科学的というより、気持ちの悪さが表に出ちゃう。でも、風向きは変わるだろうね。

他に選択肢はない。新しい肉を受け入れるか肉レスか、そのどちらかしかないから。ベジタリアン原理主義者でもない限り、そりゃ肉を選ぶよね。
ちがうかな。

「雲行きが怪しくなってきた」

「風向きじゃなくて」

「え」

「いや、続けて」

「あれや、肉の出荷が始まるっちゅう話」

「アメリカのね」

黒船はやっぱり海の向こうから来る。

バイオベンチャー企業が遺伝子編集した牛について、FDAが出荷を認可したというニュース。これまでFDAは家畜の遺伝子改変には慎重だった。人に影響が及ばないという証拠が十分でない限り、認めてこなかったわけ。どこまでの証拠で十分なのかは、とっても曖昧だった。前例はサケだけ。それでも認証まで二〇年かかった。

今回は、まず輸出用に緊急使用を認める。アメリカの畜産を守るためだった。

「でも、輸出だけってどういことよ」

「国内は世論が割れてるからやるな。そこは勝手な国やから。そやけど、リスク承知の希望者向けに出荷して、健康被害はありませんでした、と発表資料には書いてあるようやね」

「でも、全部入りだよな」

牛疫だけではなく、知られている主な病因、牛肺疫や口蹄疫などに関しても受容体が編集されている「全部入り」ウルトラデラックスバージョンなんだって。いいのよ。

「ひとつひとつ検証して認可取ろうと思たら、何十年も経ってしまう。産業が死にかけてるときやからね、早よせな手遅れになるやろ。一気に実施するほかないんちゃうかな」

「その上成長を早めてるんでしょ」

「牛は出荷までに二年半はかかる。それが三分の一になるんやてな」

「豚並じゃん」

「そやから、雲行きが怪しい言うてるんや」

「どういふこと」

「うちも試験結果を早めて、市場にすぐ反映させんかい、と」

「センター長がそんなことを。困ったもんだ」

「センター長やったらええねんけど、総理大臣から直々にお達しがあつたらしいんや。何をもたもたしとるんじゃ、税金を無駄遣いするな、ただ飯喰らいと言われたなかつたら、さっさと出さんかい、と大意そんなところで。入れ知恵した黒幕がおるんやろねえ、業界長老か内閣参与か誰か、知らんけど」

このセンターの出自からして、政治的になるのは避けがたい。実態は研究所じゃなくて、実用化を目指す試験場なんだから。これまで何度も、無意味な声明の片棒を担がされた。一年以内の成果は、数頭の抗ウイルス豚だったが、肥育する間もなく死んじゃった。三年以内の成果は、子に遺伝子を継承する親豚の誕生。子から次の世代になると、内蔵に不具合が生じて生き残れなかった。もう、次の五年以内の期限を迎える。だけど、先に外圧がきたわけよね。

「総理か……なんか、いやな響き。政治絡みになるのはいやだなあ。とたんに理不尽

なことが起こる。上司が不機嫌になってとぼちちりが来たり、地道な作業がすつ飛ばされたり、不都合なデータをもみ消せと言われたり」

ウルトラ牛肉が最初に出回り始めたのは、ファーストフード系のチェーン店だったよね。GMOであるという注意書きはある。どういうリスクがあるかまでは具体的に書いてない。他の材料と混じってるので、よく分からない。でも、味は、記憶にある肉の味がしたよ。確かにね。これが人気を呼んだわけ。

あいつと二人で行列して食べた。チェーン店は業態を変えていて、メニューに昔の面影はなかった。牛丼だけが、昔のまま復活してるのは違和感全開だよ。それなのに、飛び抜けて高い値段にもかかわらず、みんな牛を頼んでるの。

「肉やね」

「肉だよ」

お互いそれだけ呟いて、黙って食べた。いやほんと、ととてもとても久しぶりの肉だった。

ウルトラ生牛、生きている牛は輸出許可されなかった。

災禍以前でも、肥育用の雄牛は太らせるために去勢される。GMO牛は秘匿のため、出生時には去勢されるらしい。仔牛を産める母牛は、許可された企業の生産用育舎でのみ飼える。国内だけで独占しようという魂胆だろうね。

家畜はもろに戦略物資になった。

昔からそういう傾向はあったといっても、コンシューマーがスーパーで買う肉なんてありふれていたから効果は薄かった。牛が実験室外で絶滅したいまなら、母牛を秘匿する意味がある。文字通り食うか食われるかだ、冗談じゃなくね。

慌ただしくセンターでも、GMO製品化の記者発表が行われた。税金ドロボー、つて言われないために。

日本では消費量の関係で、まず豚からいく。センターで親豚が作られ、各地の民間肥育場で配送された子豚を太らせる。日本の豚は世界最先端だ、すぐに出荷可能になる。昔の流通量が復活する、価格も安くなる、待望のお肉が復活します、とぶち上げたわけ。

C I S 豚といわれたやつ。

豚は多頭出産するっていったよね。

一度に十頭ほども産む。成長を早められたC I S 豚は、さらに多くて十五頭を産む。生後わずか二ヶ月で百キロまで太る。その間ものすごい量を食べる。

食べて太るけど、大人になるわけじゃない。子豚のまま大人と同じ体重になって出荷される。急ぐのにはわけがある。急激に成長する関係で、長生きできないんだよね。選別された雌豚は三ヶ月で親豚になり、妊娠期間二ヶ月で出産する。親でいられる期間は一年なんだから。同じ理由で長生きできない。六回妊娠し、九十頭を産んでから畜殺される。

猛スピード。走り抜けるといふか、断崖を転がり落ちるみたいな一生。

スピードと寿命はトレードオフになる。あいつも言ってたけど、もともと家畜は長生きしない。だから問題ない、これでいいのだ、という理屈で進められてる。

畜産を習ったわたしの常識からしてもぶっとんでるよ。酔いそうな早さなの。とつても気持ちが悪い。

対抗上この豚も「全部入り」を目指してる。

豚にはインフルエンザ以外に深刻な感染症がある。

たとえば、豚繁殖・呼吸障害症候群 PRRS、パースって猫がごろごろっていう音と同じらしい。ヘンテコな名前だけど、毎年アメリカでは六百億円の損害が出る。白血球にある受容体 CD163 を除去すれば防げるの。まだある。中国の豚の半分を殺したアフリカ豚熱 ASF は、アフリカ豚コレラという名称が有名かも。コレラといってもコレラ菌じゃないのよ。どちらもウイルスが原因だから、受容体の編集で対応はできる。インフルがなければ、こちらの方が優先されたかも知れない。ウルトラ牛に對抗するウルトラ豚は、デラックス風味に遜色はないってね。

なんだか底が抜けてる。どこまでもエスカレートする。

それでも、CIS 豚を市場は受け入れたね。

肉になってしまうと、何も変わらない。昔の味がする。穀物主体の餌で育った、アメリカンポークっぽい肉の味。ブランド豚のような個性はなかったけど、そこまで要求するのは贅沢だろ。飲食店やスーパーに行き渡るころには、肉レスの時代などなか

ったような雰囲気になった。

動物の虐待だという声は聞こえてこない。たしかに虐待なんかしてないよね。セクターの中はどこまでも清潔で、豚は丁寧に扱われている。戸外に出す許可は下りないけど、編集豚の場合、自然放牧するほうがかえって苦痛になるのよ。風とか直射日光、低温も高温多湿も苦手なんだよ。

そう、表向きはどこも間違っていない。でも、わたしがやり過ぎだって思うのも間違っていないよね。当事者なんだから、偽善といわれても仕方ないけどさ。

「おとなしすぎる」

あいつにつぶやいてみる。

「なんやて」

「静かすぎる」

「それって不吉の前兆やな。これから事件が起こる前触れみたいや」

「子豚がおとなしいというか、ぼやっとしてるのよ」

一度口にすると、どんどん気になることが出てくる。

「寝ぼけてるわけやないよね」

「豚ってあたまいんだよ」

チンパンジー並みの知能があるといわれてる。人間の三歳児くらいという研究もある。工場畜産をしていると、そういう知能を実感する機会は少ないけど、ないわけじゃない。

「意識したことないな」

「生まれ立ての子は授乳室にいるよね。そこだと、親豚が数匹同時に飼われているわけ。子豚は十五匹づついて、それぞれ母親を探してお乳を飲む。なんだけど、親を見失う子がいるの、特定の個体じゃなく結構な割合で」

「迷子やな」

「子豚は母親の匂いを憶えてるし、親豚も子どもを憶えてる。つまり、ふつうだと迷子なんかにならない」

「けったいやな」

「あたまが悪くなってるんじゃないかな。そりゃ子豚は子どもだし、匂いを嗅ぎ分けることと知能は違うんだろうけど、そんな気がするんだよ」

「あたま、知能か」

あいつはしばらく考え込んだ。

「そういう検証はしたことないな。血液、臓器や脳細胞とか、筋組織とか異常がないかは常に検査してる。そやけど、知能検査はせえへんからな。肥育と関係ないことやし」

「豚がバカだからって、肉はまずくならないってことね」

「まあそやけど、ちょっと気になるな。BSEのこと憶えてへんかな」

「BSE、狂牛病だよね」

正しくは、牛海綿状脳症BSEは、中枢神経をスカスカのスポンジに変成させる妙な病気だよ。異常プリオンが混ざり込んだ餌が原因で拡がって、長い間、汚染国からの牛肉輸入が禁止されてた。

「正常なプリオンタンパク質の、構造異性体が原因や。そやけど、最初に異常プリオ

ンがどうやって発生するのかが分からへんかった。ウイルスと違うから、自然に発生はせえへん。ちよつと前やけど、それは遺伝子の異常からやという説が出た。あとは、ここでやってるのといっしょで、関係する遺伝子を削除して根絶する実験が行われたわけやけど」

「なんでいまBSEの話をするの」

「アホつながりや。実験で生まれた牛は、みんなアホになってた。牛は農家でふつうに肥育されたんで、こいつアホちゃうかとバレたわけやね。ふつうの牛より憶えが悪い。牛もそこそこ賢いから、飼ってたら分かる。CIS豚やったら、成長が早いから目立たへんだけで」

「共通点があるのかな」

「諸説あるけど、人でも動物でも、賢くなる遺伝子が何かはまだ分からへん。天才をデザインするのは、まだまだ不可能なんや。特定の遺伝子やのうて、組み合わせパターンやという説もある。ただやね、遺伝子編集で、その未知の何かが悪くてまう可能性はある。まあ、編集の副作用は見極めが難しいわけやけど」

「闇雲に遺伝子編集した結果なの」

「おいおい闇雲はないやろ。けどな、もし遺伝子配列のパターンに依存する問題やとしたら、そこは未知の領域になるな」

「まずいんじゃないの」

「家畜の場合、しゃーないと言うしかない。病気で死んでしまうよりはまし、どうせ食われる運命やったら、アホになって食われてもかまへんやろ」

「うーん、乱暴すぎない。しゃーないで済むのかな」

「釈然とはしなかった。でもあいつの言うとおりで、それで実害が出ないのならしょうがないのではないか。畜産科の立場からしてもそうなるよな。」

でも、なんだか気分が晴れない。

政治の道具になつてるとか、生き物をもてあそんでいるとか、不十分な検証のまま遺伝子をいじりすぎるとか。しかも、反対側に肉の復活を喜ぶ自分がいたりして。

混乱する。なにがしたいんだ、なにが言いたいんだ、わたしは。

「ひよっとすると」

悶々としていたときに、あいつが突然大きな声を上げた。

「なによ、どうしたの」

わたしは驚いて、あいつの顔をまじまじと見る。

「アメリカが生牛を隠してるのは、そういう理由なのかも知れへんな」

「そういうって、あ、アホを隠してるって意味なの」

「それだけやのうて、牛についてはBSEのイメージがある。BSEの異常プリオンが含まれる肉を食べると、人も同じ症状になる。クロイツフェルト・ヤコブ病とかプリオン病とかやな。なぜ感染するのか、メカニズムはよう分からなかった。けど、これがもし遺伝子に関係するとなるとどうやる」

「遺伝子が人に取込まれるってことなの」

「遺伝子かどうか、遺伝子異常がやけど、証明はでけへんことや」

「豚も同じ」

「豚も、鶏もな」

「みんなアホになる」

はは、とお互い乾いた笑い声をあげた。

だが、冗談で済むのか、本当なのかは分からない。世界的に政治ネタになった以上、科学的な警鐘が出るかどうかさえ不明だと思う。

人は自分が思っているほど賢くない。いまでも十分アホだけでも、さらに人類全体が感染して底なしのアホになるとしたら。

なんだか気が遠くなってきた。